

# 『帝国主義論』の諸問題（1）

倉 田 稔

はじめに

## I 序 節

- 1 普及の理由
- 2 構成と学説史的前提など
  - a 構成
  - b 学説史的前提
  - c ヒルファディングについて

## II 方法の問題

- 1 『帝国主義論』と弁証法
- 2 『資本論』との関係

## III 反動と独占

- 1 『帝国主義論』における反動規定
- 2 時代区分論

小括 反動規定

## IV 寄生性（第8章の研究）

- 1 『帝国主義論』以前の作品
- 2 『帝国主義論』第8章

小括 日和見主義 原田論

はじめに

本稿は、レーニン『帝国主義論』（初版は、ペテログラード、1917年<sup>(1)</sup>）の成り立ちおよびその批判的吟味を試みるものである。それらをいくつかの観点から考察する。それは、目次に示されたような点である。加えてこの狙いの一つは、政治思想と経済理論の関連の問題を扱おうとすることにある。

---

(1) 『レーニン全集』第22巻、大月書店、所収

## I 序 節

### 1 『帝国主義論』普及の理由

この書『帝国主義論』が大いに普及し、あるいは世界的に有名になったのは、いくつか理由がある。

第1に、これが諸帝国主義論のうち最も鋭い議論を提供していること、あるいは古典的な帝国主義論の一つとしての立派な内容をもっていること、つまりそういう意味で学説上の十分な地位を獲得していることである。

第2に、これが、あまり長い作品でなく、また副題のとおり「平易な概説」であることである。

第3に、当時終ったばかりの第一次大戦を理論的にはっきりと説明していること、または当時はそう思われたこと、である。

例えば、フォスターは言っている。「当時ボルシェヴィキ、とくにレーニンをはじめとする左翼は、この戦争の帝国主義的性格をはっきりとさししめした。彼らは、これが不正な、侵略的な、反動的な戦争であることを徹底的に証明した。戦争の帝国主義的な性質を強調するこの主張こそは、左翼と右翼および中央派から区別する基本的な一線であった。」<sup>(2)</sup>

第4は、著者が最も有名な人物であること。なにしろ出来たばかりのロシア革命の、あるいは世界史上初の労農革命の指導者であるからである。

第5は、コミンテルン出版部あるいはそれに関係ある組織つまり各国共産党、が大いに宣伝したこと、にある。この最後の点が最も大きい。

---

(2) フォスター『3つのインタナショナル』大月書店1957、254ページ

## 2. 本書の構成と学説史的前提など

### a 構成

『帝国主義論』の構成は、次のとおりである。第1章から第7までは、「純」経済的側面である。ただし、第7章は、第1章から第6章までの総括となっている。<sup>(3)</sup>同時にカウツキー主義の批判がされる。ここまでに、帝国主義の第1の規定、独占資本主義、とかかわっている。第8章は、帝国主義の他の経済的側面、あるいは社会・経済的側面の考察であり、すなわち日和見主義の経済的基盤が論じられている。第9章は、第8章に基づきながら、帝国主義政策にたいする諸態度の批判、実際はイデオロギー批判・政策批判である。この二つの章（8・9章）で、帝国主義の第2の規定、腐朽した資本主義、とかかわっている。第10章は、帝国主義の第3の規定である、死滅しつつある資本主義、にかかわっており、同時に結論である。

内容的にはしかし、このように考えられる。つまり最大の眼目は、戦争に協力した左派社会民主主義とその思想の批判である。いわゆる中央派、その中心的思想であるカウツキー主義の批判である。もちろん『帝国主義論』が経済的側面に制限されているから、彼らに対する経済学的批判である。

レーニンは、第1章から第7章までの純経済論で、そして第8・9章の社会・経済論で、両面からカウツキー主義を批判した。

### b 学説史的前提

『帝国主義論』は、もちろん、カール・マルクスの『資本論』を基礎にし、すでに私が指摘したように、ヒルファディングの『金融資本論』を大半は下敷にし、そしてブハーリンの『世界経済と帝国主義』も参考にして書き上げられたものである。

---

(3) 拙書『金融資本論の成立』青木書店

「レーニンは彼の考えの多くを、J.A.Hobson と Hieferding の作品から引き出した。」<sup>(3a)</sup>

より詳しく言えば、第1章～7章の内容に最も多大の影響を与えたのは、ヒルファディングの『金融資本論』であり<sup>(4)</sup>、第8章についてはホブソンの『帝国主義』である。<sup>(5)</sup>

#### c ヒルファディングについて

レーニンがヒルファディングをどのように見ていたかは、興味ある点である。結論的に言うと、政治的な状況の変化に従って、評価を変えていった。

『帝国主義論』の原稿（1916年脱稿）では、その前書きにあたる部分でレーニンは、ホブソンの『帝国主義論』とヒルファディングの『金融資本論』とを挙げて、「この数年間に帝国主義について……述べられたことは、本質的には、上述の2人の著者によって説かれた、もっと正確に言えば、概括された思想の範囲を、ほとんど出していない。」<sup>(6)</sup> とほめている。

しかし、1917年4月の序文では、ホブソンの書だけが高く評価されている。<sup>(7)</sup> ついで1920年7月6日の「フランス語版とドイツ語版の序文」では、ヒルファディングについて、「かつては『マルクス主義者』であり、いまではカウツキーの戦友であり、『ドイツ独立社会民主党』内のブルジョア的、改良主義的政策の主要な代表者のひとりであるヒルファディングは……」<sup>(8)</sup> と非難している。

この最後の指摘は、レーニンにとっては政治戦術上語る必要があった。なぜなら、コミンテルンが成立（1919年）し、1920年つまりこれを書いた年には、

(3a) Alec Nove, Lenin as Economist in : L. Schapiro & P. Raddaway ed., *Lenin. The Man The Theorist The Leader A Reappraisal*. London 1967, P. 198

(4) 注(3)文献

(5) レーニンは、ホブソンのこの書について記している。「帝国主義についての主要な英文の労作」

(6) 第22巻, 224ページ

(7) 同, 215ページ

(8) 同, 222ページ

独立社会民主党にたいして容赦ない批判を浴びせねばならなかった年であったからである。

というわけで、ヒルファディングにたいする評価とその変化は、政治的・政策的なものであることがわかる。ホブソンについては後述する。

## II 方法の問題

### 1 『帝国主義論』と弁証法

レーニンはこの頃、つまり1914年から15年に、ヘーゲル論理学を研究した。逆に言って、これ以前はあまり哲学は得意ではなかった。あるいはヘーゲル哲学をよく知らなかった。例えば、若い頃書いた『唯物論と経済批判論』<sup>(9)</sup>は、非弁証法的である。

レーニンは『帝国主義論』で弁証法の論理学を適用した。

この問題を Kumpf の書を利用して紹介しておく。<sup>(10)</sup> クンプフは書く。理論的分析の、抽象から具体への上向の、決定的な問題の一つは、出発点の問題である。出発のカテゴリーは、単純な直接的な無媒介的な、つまり与えられた体系の枠内で他の何者にも媒介されない規定を含む抽象物である。レーニンはそれゆえ独占から叙述を始めた。独占は『帝国主義論』の中ではその意味では抽象的カテゴリーである。ただし、他方ですでに前提をいくつか持っているので、これ自体は具体的なカテゴリーでもある。

出発のカテゴリーは、他の諸規定への移行とその体系的な発展を必然的に含むものである。独占が帝国主義の経済的本質を表すならば、移行が必然的にな

---

(9) 全集第18巻、所収

(10) Fritz Kumpf, Probleme der Dialektik in Lenins Imperialismus-Analyse. Eine Studie zur Dialektischen Logik. Veb Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin 1968, 1. Aufl. 212 S.

これには小生の書評がある（『三田学会雑誌』61巻10号）。本項ではクンプフの部分的介绍をしておく。そして彼の用語を2, 3訂正しておく。

る。産業資本における独占の叙述の後、レーニンは銀行資本を叙述した。銀行の集積は産業の集積を前提している。そこで銀行の集積へと移行する。また銀行資本の独占は産業資本の独占よりも具体的なカテゴリーである。

金融資本は、産業の独占と銀行独占との統一物であり、総合である。

レーニンは金融資本で達した具体性の段階から、帝国主義のより一層具体的な諸規定へ上向した。資本輸出、領土分割等である。ここでは各々のカテゴリーは、それに先行する諸カテゴリーが含まれたいるため、より具体的である。

最後に『帝国主義論』ではまず帝国主義の経済的基礎が研究され、その後その諸局面に基づいた政治的・イデオロギー的研究がなされる。これは科学的上向法にかなっている。

弁証法の根本である矛盾の論理の点からも次のように言える。

レーニンは、帝国主義のあらゆる矛盾を資本主義の根本矛盾から引き出した。

『帝国主義論』では資本主義の一層発展した矛盾が問題となる。それは、新しい段階の生産の社会化と私的資本主義的取得との矛盾として、独占と競争との矛盾として、現れる。この矛盾が、帝国主義の諸契機を形成し、その内的運動と帝国主義の発展の全方向の規定の、推進動機である。各々の矛盾は、一つの共通の基礎から展開され、契機が「外」から入ってくるのではない。

この矛盾が、銀行資本の領域で具体化される。生産諸力の発展の結果である生産の集積は、規模をまして、生産手段の社会的管理を要求する。銀行は生産手段の社会的管理の用具である。だが銀行資本の集積は、一定の体系の枠内での部分的解決である。

だからもっと高い段階でのより大きな鋭い矛盾が問題となる。金融資本の形成は、独占と商品生産・私的所有という環境との矛盾にもとづく。生産の社会化の特殊な形式としての金融寡頭制支配が形成されて、この矛盾が資本主義の枠内で解決される。

金融資本は新しい矛盾をつくる。資本所有と、生産への資本使用との間の矛盾である。これを解決するために資本輸出の契機が生ずる。

この契機を基礎に帝国主義的植民政策が生まれる。資本所有と資本使用との

分離が大規模に拡大されると金融権力を持ったいくつかの国家が選り出される。ここから帝国主義列強の寄生性と一層の矛盾が生ずる。資本輸出諸国が発展し、資本輸出によって従属国が抑制される矛盾、全世界の資本主義の一層の発展と深化の矛盾、一方で資本輸出が独占的諸団体の中で根本的矛盾を作る。これらの諸矛盾を基礎として、帝国主義列強の間の矛盾が生まれる。これは、帝国主義戦争を引き起こす。

レーニンは、独占が帝国主義の本質とし、全体系の展開は、本質から現象へ展開し、資本輸出、経済的・領土的世界分割のような帝国主義の個々の要素は独占の特殊な現象形態である。と見た。

## 2 『資本論』との関係

日本の論者は、『帝国主義論』の第1章について多くの議論を寄せているので、それから見ておこう。そのために先ず、『帝国主義論』第1章の本質的要約的抜粋をしておこう。

工業の巨大な成長と、ますます大規模化してゆく企業への生産の集中のおどろくほど急速な過程とは、資本主義の最も特徴的な特質の一つである。

集積は、その発展の特定の段階において、おのずからいわばぴったりと独占に接近してくる。

生産の集積による独占の生誕は、総じて、資本主義の発展の現在の段階の一般かつ根本的な一法則である。

競争は独占に転化する。

以上が要旨である。

武田は書く。

レーニンやヒルファディングは、帝国主義の経済的本質の解明にあたって、彼らの眼前にある、それこそ「最高」または「最近」の資本主義を大正とした。そして、その経済的諸現象を直接『資本論』で展開されているような資本主義経済の原理論をもって説明しようとした。たとえば、レーニンの『帝国主義論』の第一章では「最新の資本主義の経済における唯一ではないにしても、もっとも重要な現象の一つ」

として、「生産の集積と独占」が述べられているのであるが、その「独占」は、彼によれば、マルクスが『資本論』のなかで、自由競争—生産の集積—独占という形で論証しているものだというのである。そこで、この「独占」を出発点とする彼の『帝国主義論』は、すくなくともその端初においては、『資本論』で説かれているところに直結するという形をとっていることになる。そしてまた、あえていえば、そのことが、以後の彼の所論をも、眼前の経済的現象を例証としつつ、この「独占」理論的に展開していったものという形をとらしめているのである。<sup>(11)</sup>

しかしわれわれは、この解明を、たとえばレーニンがおこない、多数のマルクス学者が追随しているように、「自由競争が生産の集積をうみだし、この集積はその発展の一定段階では独占をもたらす」という形で、いわば原理論を直接適応しておこなうわけにはいかないであろう。<sup>(12)</sup> 以上。

宇野は含蓄のある発言をしている。「資本の集中、集積の増進は、一定の段階では独占になるといえば、誰も疑問とするところがないように考えられますが、よく考えてみると、そういう考えの裏には常に一定の市場を想定し、特定の産業を予想するということがあるのではないのでしょうか。『資本論』におけると同様の] 抽象的規定の下では『独占』を説くことができないのではないのでしょうか」<sup>(13)</sup>

ではどのようにすればよいか。金子ハルオは言う。

『資本論』第一巻第七編第二第三章「資本主義的蓄積の一般的法則」における「生産と資本の集積・集中（および「独占への傾向）」と『帝国主義論』第一章「生産の集積と独占体」における「生産と資本の集積・集中」およびそれにもとづく「独占の形成」とは、そのおかれた論理次元を異にしている。「生産と資本の集積・集中」と「独占」は、ぜんしゃでは、「競争の現実的作用」をその「範囲外」とした「資本一般」の論理的次元において把握されており、後者では、

(11) 武田隆夫編『帝国主義論』上, p. 4

(12) 同 p. 20

(13) 宇野弘蔵『「資本論」と社会主義』岩波書店 1958, 199～200 ページ



すでに諸資本家の「競争の現実的作用」がいくつかの資本主義的諸特質をその対立物に転化しはじめたような論理次元において把握されている。したがって、『資本論』の『帝国主義論』への理論的上向＝発展は、『資本論』の資本蓄積論と『帝国主義論』の独占体論との無媒介直結によってではなく、とくに『経済学批判』プランにみられ『資本論』＝「資本一般」の「範囲外」にあった諸資本間の「競争の現実的作用」を考察するいわゆる「競争論」を媒介としておこなわれるのである。<sup>(14)</sup>

一の瀬秀文も書く。「マルクスの資本集中論は競争論の領域である」。<sup>(15)</sup>

帝国主義論の理論的出発点は、蓄積（『資本論』第1巻第7編第23章）でなく、競争におくべきである。そうでなくては、『資本論』の継承であっても、発展、具体化とならない、と。

『競争論』の理論的次元で集中や独占を説くというのは、一般的には正しい。レーニンはそれを認識していたとは思えない。まただからといってレーニンの役割を否定する必要もない。後世の学者が行えばよいのである。しかし、その『競争論』の完成を後世の学者が行っていないのはまことに残念である。また『競争論』も、自由競争段階の競争論と独占段階の競争論との2つがあるだろう。

さて実はこの問題をすでにマルクスも考えていた。マルクスは『資本論』で書いている。「この資本集中、または資本吸引の法則はここでは展開されえない」。<sup>(16)</sup> 集中にかんしてしか言われていないが、集積についてもある程度あてはまるだろう。「ここでは」というのは、『資本論』＝資本一般の意味である。ここでは一般的に抽象的に論ぜられるにすぎず、「簡単な事実示唆で充分である」。<sup>(17)</sup> 集積・集中それ自体の持つ性格からそうなる。「競争戦は……」云々<sup>(18)</sup> とあるように、『競争論』で、より一層展開されるはずであった。

(14) 『『資本論』の創造的発展としての『帝国主義論』』（『経済』1967年12月）、210ページ

(15) 『経済』1967年5月224ページ

(16) 長谷部訳『資本論』第1巻972ページ

(17) 同上。

(18) 同上。

これ以上詳細に論じないが、この問題は、『競争論』だけにとどまらず、利潤率の傾向的低落の法則（『資本論』第3巻）、『信用論』、『株式資本論』、との関わりで充分展開されねばならない。

次に、レーニンの生産の集積その他にたいして、すでに上に挙げたような反論があるが、実はマルクスの集積論とは少し概念が違うことは、レーニンのためにも指摘しておいてよいだろう。

レーニンは、資本の集積・集中ではなくて、生産の集積・集中という用語を『帝国主義論』の第1章で使っている。

内田は言う。「資本の集積・集中が生産の集積に対応するのであって、資本の集中に生産の集中を対応させることは、無意味であるか、あるいは概念の混乱を意味するであろう。正しい意味では、「生産の集中」はこれと別個の概念であろう。生産が一定の企業もしくは一定の地域におこなわれることを指すものと解釈しなければならない。」<sup>(19)</sup>

常盤政治氏は言う。レーニン『帝国主義論』第1章の冒頭にあるように、生産の集中を巨大企業への集中度をあらわすものとみてよい、と。

この4つの概念を『帝国主義論』の中で比較し、つきあわせてみると、お互いがこれとこれ、それとこれに対応し合うというのではなく、「資本の……」と「生産の……」とが区別なしに、ほとんど同じ概念として使われている。つまり逆に言えば、レーニンはマルクスのように「資本の……」ではなくて、「生産の……」を多用したと言える。

もし厳密に区別すれば次のようになる。『資本論』第1巻の次元では産業資本が前提となっているから、資本の集積は生産の集積でもある。資本の集中も生産の集中になる。しかし商業資本や利子生み資本の世界では資本の集積や集中は、生産の集積や生産の集中とはならない。

さて『帝国主義論』での次元のように金融資本の時代では、とりわけそれを

(19) 『マルクス経済学大系』下、34 ページ

考える必要がある。つまりたとえば銀行に資本が集積・集中されても、生産の集積とはならない。したがって産業資本が集積集中される場合は、生産の集積などという用語を使った方がはっきりすることになる。レーニンも特に第1章では「資本の……」という語を使わない方が正しいと、当然考えたであろう。

### Ⅲ 反動。独占論と時代区分論

#### 1 『帝国主義論』における反動規定

レーニンが『帝国主義論』を書いた目的の一つは、近代帝国主義の反動性の立証である。本項では、そのための論旨展開を跡づけ、吟味しようとする。ただしレーニンは『帝国主義論』の中で、言葉としては反動を多用していない。

レーニンは、『帝国主義論』を、独占[論]から論じ始めた。第1章は、「生産の集積と独占[体]」である。これは多くの人から高く評価されている。しかしレーニンは、彼の目的に従属させて、独占論から帝国主義論を叙述しはじめたのである。したがってレーニン以外の人には、帝国主義論を独占から叙述を始める必要はない。

レーニンの目的は何であったか？ その諸目的の一つが、帝国主義の反動性を暴露することであった。もちろん、帝国主義というものは反動的であって、民主的な帝国主義などはない。レーニンはこれを社会科学的に論究しようとした。

彼は、第1章で言う。「われわれの目の前にあるものは、独占に、その圧迫に、その専横に服従しない者を独占者が絞殺することだ。」(44 ページ)

「支配関係とそれに結び付いた強制の関係——これこそが、『資本主義の発展における最新の局面』にとって典型的なものであり、また実際に発生したものである。」(46 ページ)「第2章 銀行とその新しい役割」で、彼は書く。「銀行は、仲介者という控え目の役割から成長転化して、資本家と小経営主との相対の貨幣資本のほとんどすべてと、またその国やいくたの国々の生産手段および原料資源の大部分を自由にする、全能の独占者となる。」(51 ページ)

産業独占体と大銀行の癒着した体制が金融資本であり、その支配をレーニンは第3章で論ずる。

「小数者の手に集積されて事実上の独占を享有している金融資本は、巨額の、しかもますます増大する利潤を獲得し、こうして金融寡頭制の支配を強化し、全社会にたいして独占者への貢ぎ物を課している。」(89 ページ)

重要な指摘はつぎである。「独占は、それがひとたび形成され、数十億の金を自由自在にするようにと、絶対的な不可避性をもって、社会生活のすべての方面に浸透してゆく……」(96 ページ, стр. 355)

そして、金融寡頭政治の支配が確立されたところでは、「もっとも広汎な政治的自由でさえも、われわれが自由のない国民となることをもはや救いうるものではない」と、『バンク』誌から引用する。

第4章からは、レーニンは、国際的關係に目を転ずる。

資本輸出により、また金融資本は、世界を分割する。世界の分割は、他国の領土の独占的領有のことである。金融資本の国際政策は、国家的従属の幾多の過渡的形態を作り出す。金融資本は、自由ではなく支配を欲する<sup>(20)</sup>。

## 2 時代区分論

レーニンの政治思想の最も卓越した点の一つは、近代資本主義・近代史の時代区分にかかわる。ここでは、対戦中の発言にかぎって着目しよう。この政治認識は、彼の経済理論と不可分に結びついている。

時代区分論が不明確な形で出ているのは、「社会主義インターナショナルの現状と任務」の中である。「われわれは、日和見主義者につぎのように答える。この戦争の具体的=歴史的な性格を無視して、祖国の問題を提起することはできない。この戦争は帝国主義戦争、すなわち、もっとも発展した資本主義の時代、資本主義の終りの時代の戦争である。<sup>(21)</sup>」同じ作品の最後にもある「19世紀の最後の3分の1と20世紀の初めの、苛酷きわまる資本主義的奴隷制と

(20) この一句はヒルファディングの言葉。

(21) 全集 21 巻, 25 ページ

もっとも急速な資本主義的進歩との、長期にわたる「平和な」時代……<sup>(22)</sup>」しかしこれらは、まだ不明瞭な発言である。戦争の問題とからめて見ている。

作「ロシアのジュデコム派」でも、プレハーノフを批判しているが、これもまだ不明確である。レーニンは書く。プレハーノフは、「帝国主義時代（すなわち、マルクス主義者が一般にみとめているところによれば、資本主義の崩壊の客観的条件がすでに成熟し、社会主義プロレタリアートの大衆が現に存在している時代）を、ブルジョア民主主義的民族運動の時代と混同し、プロレタリアートの国際革命によってブルジョア祖国を破壊する時期がすでに成熟している時代を、ブルジョアの祖国の発生し結集した時代と混同している。」<sup>(23)</sup>と。

作「『ナーシェ・スローヴォ』編集局へ」でも、戦争の問題で述べる。

帝国主義戦争は、「資本主義の最後の発展段階の時代、一国の限界内でのブルジョア国家が生命をおえてしまった時代の戦争」である、云々。

作「よその旗をかかげて」の中で彼は、ポトレソフを批判して言う。ブルジョアジーはポトレソフのやったのと同じすりかえをやらうとつとめている。すなわち「帝国主義時代を、ブルジョア進歩派の運動、民族解放運動・民主主義的解放運動の時代とすりかえようとしてつとめている。」<sup>(24)</sup>

レーニンはいう。「マルクス主義者は、封建的＝絶対主義勢力にたいするブルジョア的民族解放運動の進歩性を否定したことは、けっしてなかった。」<sup>(25)</sup>

さてこの論文で明確な時代区分論が出て来るのである。レーニンは通例の歴史的時代区分をあげる。つまりマルクス主義文献やカウツキーらによっていつも述べられたものである。（一）1789—1871年（二）1871—1914年（三）1914—。

フランス大革命からフランス＝プロシア戦争までの第1の時代は、「ブルジョアジーの興隆の時代、彼らが完全な勝利をおさめた時代である。それはブ

---

(22) 27—28 ページ

(23) 110 ページ

(24) 133 ページ

(25) 134 ページ

ブルジョアジーの上向線であり、一般にブルジョア民主主義運動の、とくにブルジョア民族運動の時代であり、命数のつきた封建的=絶対主義諸制度の急速な崩壊の時代である。」第2の時代は、「ブルジョアジーの完全な支配と衰退の時代であり、進歩的ブルジョアジーから、反動的な、さらにもっとも反動的な金融資本への移行の時代である。」第3の時代は、「ブルジョアジーを、第1の時代の封建領主と同じ『地位』においている。これは、帝国主義の時代であり、また帝国主義から生ずる帝国主義的激動の時代である。」<sup>(26)</sup>

カウツキーらのかつて述べたこの立場を、レーニンは墨守しよとする。日和見主義者はこの観点から方向転換していると言う。「第3の時代にも、国際的紛争は、その形から見れば、依然として第1の時代のばあいと同じ国際的紛争であるが、しかしその社会的内容と階級的内容は、根本から変化した。」<sup>(27)</sup>「ブルジョアジーは、興隆しつつある先進的階級から、転落しつつある、衰退的な、内面には死んだ、反動的な階級になった。」<sup>(28)</sup>レーニンにとって最も大事な観点は、ブルジョアジーが進歩的か反動的かである。その点から時代区分することである。もっともそれは、かつてのマルクス主義者は行っていた。レーニンの特徴は、第1次大戦のさなかでもその観点を堅持することであった。

小冊子『社会主義と戦争』（ジノヴィエフと共著）でも、まず戦争の型について論じている。

「フランス大革命は人類の歴史に新しい時代をひらいた。そのときからパリ・コムニューンまで、つまり1789から1871年までは、戦争の一つの型として、ブルジョア進歩派の民族解散戦争があった。いいかえれば、これらの戦争の主な内容と歴史的意義は、絶対主義と封建制度を打倒し、それらを掘りくずし、外国の圧制を除去することにあった。だからこそそれらは進歩的な戦争で」あった。<sup>(29)</sup>

(26) 139 ページ

(27) 141 ページ

(28) 142 ページ

(29) 306 - 7 ページ

「資本主義は、封建制度との闘争のさいには諸民族の解放者であったが、帝国主義的資本主義は諸民族の最大の抑圧者にかわった。資本主義は進歩的なものから反動的なものにかわった。」<sup>(30)</sup>

「ツィンメルヴァルド左派の決議草案」でもレーニンは書く。

「現在の戦争は、ブルジョアジーが進歩的なものから反動的なものとなった全然別の歴史的時代によって生み出されたものである。」<sup>(31)</sup>

「帝国主義は、労働者階級に、階級闘争や、窮乏や、失業や、物価騰貴や、トラストの圧制や、軍国主義の未曾有の激化を、もっとも自由な国さえふくめて、すべての国々に頭をもたげている政治的反動を、もたらす。」<sup>(32)</sup>

レーニンは、進歩と反動の時代を区別する。そして帝国主義は、また帝国主義戦争は反動的であるとする。ここから帝国主義を打倒すべきだという論が出て来る。

#### 小括 反動規定

レーニンが独占資本主義を反動の時代とし、それゆえ、革命を主張することができる点と、吟味しておきたい。

『帝国主義』の中で、彼は、帝国主義を反動的なものに見なしている（言葉としては多用していない）。それはまた『帝国主義』全編を貫くモチーフでもある。そして彼が独占から書き始めたのは、そのためでもあった。つまり独占資本あるいは金融資本が結局反動になると言いたいためでもあった。

帝国主義は反動的である。そして、反動は革命によって倒すべきだという問題を考えよう。もし時代が反動的であればそれを倒してよいというのは、理論の上では間違いではない。さて時代が反動だと規定するには、客観的な指標が必要である。もしそれが確認されたとして、つまり反動的だと認められたとし

(30) 307 - 8 ページ

(31) 355 ページ

(32) 356 ページ

て、今度はその上に、それを倒すやり方が問題となる。議会を通じて反動体制を倒すこともできる。あるいは実力革命で倒すこともできる。レーニンのこの時代の政治論文は、武力革命方式を述べている。つまり帝国主義戦争を内乱へ、というスローガンを掲げている。内乱, Bürgerkrieg, civil war は、もちろん武力革命を指す。この戦術は、一つの戦術である。仮に反動だと規定できたとしても、この戦術を採用してよいことには必ずしもならないのである。

## VI 寄生性 (第8章の研究)

レーニン『帝国主義論』の第8章は、第2インタナショナルが崩壊した経済的原因を研究し論述したものである。

ここで「経済的」ということを強調しておきたい。経済的原因に限っているのは、『帝国主義論』の内容を帝国主義の経済的側面に限定しているからでもある。

また第2インタナショナルの崩壊といっても、実際は組織的に崩壊したのではなく、思想的・政治的に崩壊したことを意味している。その上、思想的・政治的崩壊といってもレーニンの意味である。つまり第一次世界大戦に協力してしまったことである。だから戦争を是認しても、組織的に崩壊したわけではない、それどころか組織を守るために戦争に賛成したくらいである。

また第2インタナショナルの属する政党は、戦争への賛成を止むをえないことと考え、思想的・政治的に崩壊したとは認識していない。

### 1 『帝国主義論』以前の作品

『帝国主義論』以前の諸作品ですでにレーニンは、第2インタナショナルの崩壊の経済的原因を数カ所で論じている。それらを取り上げておきたい。

言うまでもなく、第2インタナショナルの崩壊の原因は、経済的なものだけではない。運動上の、思想・イデオロギー上の、総じて政治上・組織上の原因であり、それらこそ直接の原因である。経済的原因は、第2インタナショナル崩壊の間接的原因である。『帝国主義論』以前のレーニンの作品では、政治的な



原因が数多くの箇所でも論じられている。だから、彼が経済的原因だけを論じているのではないことは、確認すべきである。

彼は、「戦争にかんするテーゼ」および「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義派の任務」で述べる。

「この崩壊の原因は、小ブルジョア的日和見主義がインタナショナルで実際に優勢をしめていたこと」<sup>(33)</sup> である、と。

「よその旗をかかげて」（1915年2月以降執筆）で彼は、植民地領有・植民地領土の拡張を取り上げる。

それは、1870年～1914年の時代の、また大国家の大多数の「著しい特質の一つ」であった。これが経済的には何を意味したか？と、彼は問う。その答えはこうである。

「それはブルジョアジーにとっては、一定の超過利潤と特別の特権との総和を意味し、ついで、それは疑いもなく、ごく僅かな小ブルジョアにとっても、さらに高級職員や労働運動の役員その他にとっても、これらの『ピローク』<sup>(\*)</sup>の残りものを頂戴する可能性を意味した。労働者階級のごく僅かな小数者が、このように植民地からの利得、特権からの利得の残りものを「享有」することは、例えば、イギリスで生じているのであるが、—これは、すでにマルクスとエンゲルスによって認められ指摘された、争う余地のない事実である。しかし、その当時にはイギリスだけの例外的な現象であったものが、ヨーロッパのすべての大資本主義国が大規模な植民地領有へ移るにしたがい、また一般に、資本主義国に共通の現象になった。」<sup>(34)</sup>

日和見主義成熟の経済的原因論は、本質的には上の引用に尽きる。これが後に『帝国主義論』で全面的に発展されるのである。

作品「ロシア社会民主党在外支部会議」で彼は、社会主義的日和見主義の主

---

(33) 4 ページ

(\*) ロシア饅頭・パン

(34) 145 ページ

要な社会的支柱で、かつプロレタリアートに対するブルジョア的影響の伝道者として、労働者階級の一定の層と、社会主義諸党内の小ブルジョア的同伴者とを挙げている。前者を説明して、「労働運動内の官僚。植民地の搾取からの所得、また世界市場での『祖国』の特権的地位からの所得の一部分のおこぼれを貰った労働貴族」<sup>(35)</sup>としている。ここで労働貴族という用語を使っていることに注意したい。

「第2 インタナショナルの崩壊」で彼は再び論ずる。

「日和見主義は、特権的な労働者層の比較的平和で文化的な生存が彼らを『ブルジョア化』し、彼らに自国の資本の利潤のおこぼれを与え、零落させられ貧窮している大衆の厄災や苦難や革命的気分から彼らを分離させた、資本主義発展の一時代の特殊性によって、数十年の間に生み出されたものである。小市民の『上層』または労働者階級の貴族（および官僚）としての自分の特権的地位を擁護し強化すること、——これが、小ブルジョア的=日和見主義的希望とそれにふさわしい戦術との、戦時における自然の継続であり、これが今日の社会帝国主義の経済的基礎なのである。」<sup>(36)</sup>

同じ論文の他の箇所でも言う。

「労働運動における排外主義と日和見主義との経済的基礎は同一のものである。すなわち、それは、『自』国の資本の特権のおこぼれを頂戴しているプロレタリアートと市民の少数の層が、プロレタリア大衆、一般に勤労者と被圧迫の大衆にたいして対抗してむすぶ同盟である。」<sup>(37)</sup>

この作品では、社会排外主義<sup>(38)</sup>という用語を使っている。また彼は、日和見

(35) 155 ページ

(36) 242 ページ

(37) 244 ページ

(38) 普通には、社会主義を唱えながら、外国を排斥するもの。レーニンによるとこうある。「社会排外主義とは、ブルジョア的腫れ物である日和見主義が、社会主義政党の内部でいまままでおりの存在をつづけられなくなったほどに成熟したものである。」(244 ページ) 他の箇所ではこうも書いている。「社会排外主義とは、完成された日和見主義である。」(316 ページ)

主義の社会層をよりくわしくあげている。つまり、「国会議員、ジャーナリスト、労働運動の役員、特権的な職員、プロレタリアートの若干の層からなるまとまった一社会層」<sup>(39)</sup>である。

レーニンは、「イギリス人の平和主義とイギリス人の理論ぎらい」で、イギリスについて述べる。

「イギリスの労働組合は、賃金労働者の約五分の一を包含している。これらの労働組合の指導者は、大部分自由主義者であって、マルクスは、ずっと昔に彼らをブルジョアジーの手先と呼んだのである。」<sup>(40)</sup>

小冊子『社会主義と戦争』の中で、レーニンとジノヴィエフは、日和見主義と社会排外主義との経済的基礎に論及している。<sup>(41)</sup>そこでは、既に示した主張が概括されている。

「日和見主義と第2インタナショナルの崩壊」でも、祖国擁護の経済的本質を説明している。

「すべての大国ブルジョアジーは、世界を分割し搾取するために戦争を行っている。労働官僚、労働貴族、小ブルジョア的同伴者の小さな層には、ブルジョアジーの大きな利潤からのかけらが落ちこぼれるかもしれない。社会排外主義と日和見主義との階級的基礎は同一である。すなわち、それは、労働階級の大衆に対抗しての、特権的な労働者の小さな層と、『自』国のブルジョアジーとの同盟であり、ブルジョアジーに搾取される階級に対抗しての、ブルジョアジーの従僕とブルジョアジーの同盟である。」<sup>(42)</sup>

『帝国主義論』以前にレーニンが日和見主義の経済的基礎について述べた主要点は、以上のものである。『帝国主義論』第8章ではこれらの議論が豊かに展開されるのである。

(39) 250 ページ

(40) 264 ページ

(41) 317 ページ

(42) 第22巻、124 ページ

## 2 『帝国主義論』第8章

『帝国主義論』第8章でレーニンは、「帝国主義に固有の寄生性」を述べる。これは、彼によれば、帝国主義のもう一つの非常に重要な側面である。

彼は、国内の独占および、植民地領有の独占が、停滞と腐朽との傾向をもつといい、さらに、帝国主義でのその結果を見る。帝国主義とは、小数の国に貨幣資本が大量に蓄積されることである。そして「金利生活者、すなわち『利札切り』で生活している人々、どんな企業にも全く参加していない人々、遊惰をその職業とする人々の階級」が異常に成長する。「帝国主義の最も本質的な経済的基礎の一つである資本輸出は、金利生活者の層の、生産からの完全な遊離をますます強め、いくつかの海外の諸国や植民地の搾取によって生活している国全体に、寄生性という刻印を押す。」<sup>(43)</sup>

レーニンは、ホブソン<sup>(44)</sup>の説明を紹介する。

ホブソンは、帝国主義と「金融業者」の利害との結びつき、そして彼らの利潤を記述してから書く。「この明確に寄生的な政策の指導者は資本家であるが、この同じ動機は、労働者の特殊の部分に作用している。」<sup>(45)</sup>

またホブソンは、古い帝国の力を弱めたものは2つの事情であると言い、第1のものをレーニンは引用する。それは「経済的寄生性の習慣であって、これによって支配国家は、自国の支配階級を富ませ、自国の下層階級を買収しておとなしくさせておくために、その属領、植民地、従属国を利用している。」<sup>(46)</sup>

レーニンは、ホブソンの研究に依って語る。「世界の最も商業的な国で金利生活者の収入が、外国貿易収入の5倍にもものぼっている！ここに帝国主義と帝国主義的寄生性の本質がある。」<sup>(47)</sup>「世界は、一握りの高利貸国家と圧倒的多数

(43) 同, 319～320 ページ

(44) ジョン・アトキンソン・ホブソン John Atkinson Hobson, 1858 - 1940. 彼の著作目録は、『異端の経済学者の告白ホブソン自伝』（新評論 1983）の巻末にある。

(45) 322 ページ

(46) 同

(47) 320 ページ

の債務国家との分裂した。」

以上の議論を、シュルツェ＝ゲーファニッツ、ヴァルタースハウゼン、シルダー、ランスブルグの作品によって補完する。つまり諸列強が金利生活者国家になってゆくことを描く。

例えば、シュルツェ＝ゲーファニッツは、こう書いている。労働者の上層と本来のプロレタリア的下層との間に系統的な区別をもうけることをよぎなくされている、と。

レーニンは議論を進める。「金利生活者国家は、寄生的な、腐朽しつつある資本主義の国家であり、そしてこの事情は、一般にはそのあらゆる社会的政治的条件に、特に労働条件における二つの主要な潮流に、反映しないではおかない。」<sup>(48)</sup>

最後にレーニンは、エンゲルスを持ち出す。レーニンは言う。「マルクスとエンゲルスは、労働運動における日和見主義とイギリス資本主義の帝国主義的特質とこの関連を数十年にわたって系統的に研究した。」<sup>(49)</sup> こうしてレーニンは、エンゲルスのマルクスあて手紙（1858年10月7日）を紹介する。

「イギリスのプロレタリアートは、事実上ますますブルジョア化しつつあり、その結果、すべての国家のうちで最もブルジョア的この国家は、ついにはブルジョアと並んで、ブルジョア的貴族とブルジョア的プロレタリアートを持つところまで行きつこうと思っているように見える。全世界を搾取している国民にあっては、これは確かにある程度まで当然のことである。」

またエンゲルスは、1881年8月11日の手紙でこう述べる。「中産階級に身売りしたか、あるいは少なくとも彼らから金を貰っている人間に、甘んじて引き回されている最悪の労働組合」。

さらにカウツキーあて手紙（1882年9月12日）ではこうである。「労働者は、イギリスの世界市場独占と植民地独占とのおすそわけに気楽にあずかってい

---

(48) 322 ページ

(49) 327 ページ

る。」

彼はこの問題をできるだけはっきり示すために、先ずホブソンを利用し、ついでドイツの諸学者を援用し、最後にエンゲルスの手紙を披瀝し、最終的な結論に達する。

「日和見主義は、もはや今日では、それが19世紀の後半にイギリスで勝利を得たように、数十年の長きにわたってある一酷の労働運動における完全な勝利者となることはできない。日和見主義は幾多の国で最終的に成熟し、爛熟し、ついに腐朽してしまって、社会排外主義として、ブルジョア政治と完全に融合してしまっただのである。」<sup>(50)</sup>

レーニンがこの章で帝国主義の寄生性を取り上げたことは意識的であった。彼は強烈な目的を持っていた。実は寄生性の労働運動への反映こそ、彼が主張したかったことに他ならない。

レーニンは『帝国主義論』第8章で、資本主義の寄生性と腐朽性を明らかにした、それは労働運動における日和見主義と社会排外主義の経済的原因を、基礎を解明しようとしたためである。それこそ彼の第8章のまぎれもない目的であった。

違った表現での彼の結論を引用しておこう。

「帝国主義は、世界の分割と他国の搾取とを意味し、一握りの最も裕福な国々が独占的高利潤を得ることを意味するが、その帝国主義は、プロレタリアートの上層部を買収する経済的可能性を作りだし、そのことによって日和見主義を培養し、形成し、強固にしている。」<sup>(51)</sup>

レーニンの実践的目的は、国際的及びロシア<sup>(52)</sup>の日和見主義の経済的基礎を暴露しようとした。

この日和見主義のプロレタリアートとは、もちろん第2インタナショナルで

(50) 329 ページ

(51) 324 ページ

(52) 章末の注でレーニンは、公然たるまた隠蔽された形の社会排外主義者の名を具体的に挙げている。

ある。彼らが戦争に協力したその原因の一つとして、レーニンは解答を掲げたのである。

### 小括 日和見主義原因論

『帝国主義論』第8章および9章は、帝国主義の第2の規定、寄生性と腐朽性を論じたものである。そしてその真の狙いは、第2インターナショナルが崩壊した一原因の摘出である。つまり帝国主義諸国が従属国から超過利潤を獲得し、それを労働者階級の一部がおこぼれにあずかるという筋書きである。

帝国主義国が寄生的になることは正しい指摘である。しかし労働者階級の一部が日和見主義におちいる一原因として、超過利潤のおこぼれにあずかるからというのは正しいであろうか。実はこれ自体は間違いではない。しかし日和見主義におちいる原因は、主に政治的・社会的原因である。例えば、合法性を失いたくない、弾圧をかわしたい、今までの運動の成果を失いたくない、非合法活動に慣れてもいないしその自信もない、政府・軍部の支配に勝てそうもない、民衆の戦争熱・ナショナリズムに抗し切れない、という諸理由で、やむなく戦争に協力してしまうのである。

超過利潤のおこぼれにあずかるからという説は、それ自体間違いではないにしても、原因論としてはきわめて一面的に過ぎる。ただし、経済論として述べるかぎり、理由としてはこれくらいのことしか挙げられないかもしれない。『帝国主義論』は経済論にかぎったのだから、である。

もちろん、『帝国主義論』以外のレーニンの当時の諸作品、論説、その他、では政治的原因を多面的に論じているので、彼がこれだけでその原因だと理解していたというわけでは全然ない。